

### 実証授業

#### (1) 研究の仮説の検証に当たって

これまでの研究で、生徒が我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽のよさを味わうことができるための指導の在り方を検討してきた。研究の仮説を基に授業仮説を設定し、これまでの研究を生かした指導により、生徒が我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽のよさや表現する喜びを味わうことができるかを授業を通して検証したいと考え、実証授業を実施した。

#### ア 対象者

川内市立川内北中学校 第1学年 男子21人 女子17人 計38人

#### イ 授業仮説

- ① 雅楽を身近な音楽として味わう場面において、雅楽の旋律を合奏する活動を位置付ければ、生徒は雅楽の演奏の特徴に気づき、そのよさを味わうことができるのではないかと。
- ② 「鹿児島おはら節」を教材化し、締太鼓を用いた表現活動を取り入れれば、生徒は学習に意欲的に取り組み、郷土の音楽の雰囲気味わうことができるのではないかと。
- ③ 郷土の音楽を表現する場面において、和太鼓のリズム、歌詞、お囃子等を自分たちで工夫して演奏する活動を位置付ければ、生徒は民謡への興味をもち、表現する楽しさを味わうことができるのではないかと。

#### (2) 実証授業の実施と考察

#### ア 題材名 「我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽に親しもう」

- 教材 雅楽「越天楽」（日本古曲）  
「鹿児島おはら節」（鹿児島民謡）  
「沖永良部の子守歌」（沖永良部民謡）

#### イ 指導目標

- 雅楽や郷土の音楽に興味をもち、進んで表現や鑑賞に取り組めるようにする。
- 楽器の音色や旋律の特徴を感じ取り、工夫して表現に生かすことができるようにする。
- 雅楽や郷土の音楽の特徴を生かした器楽表現や歌唱表現ができるようにする。
- 楽曲の雰囲気と曲想とのかかわりや、友達の演奏の工夫している点に気を付けて聴くことができるようにする。

#### ウ 指導に当たって

#### ○ 題材観

生徒たちは、中学校に入学してからこれまで合唱やリコーダーによる器楽合奏、鑑賞に取り組んできているが、その大部分が西洋音楽が中心で、我が国の伝統的な音楽の学習は、本題材が初めてである。生徒が国際社会を生きる日本人としての資質を高めるためには、我が国の文化や伝統を理解し、愛情をもち、これを尊重する態度を育てていくことが大切である。しかし、生徒は我が国の伝統的な音楽に対して、「特別なもの」というイメージをもち、日本独特の音楽に進んで親しもうとする姿は、ほとんど見られない。

そこで、ここでは我が国の伝統的な音楽と西洋音楽との比較をしたり、和楽器を郷土の音楽の表現活動に生かしたりする活動を通して、生徒が我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽に興味をもち、鑑賞や表現に意欲的に取り組み、よさを味わうことができるようにすることをねらいとして本題材を設定した。

#### ○ 指導観

日ごろから様々な音楽に親しんでいる生徒が、我が国の伝統的な音楽に親しみ、そのよさを味わえるためには、日常生活における我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽の存在に気づき

実際にそれらを実験する体験が必要である。そこで、雅楽や親しみやすい郷土の音楽を身近な楽器や歌で演奏する活動を設定することにより、我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽をより身近に感じさせ、そのよさを味わうことができるようにしたい。

指導に当たっては、特に次の点に留意したい。

- ・ 初発の感想のまとめや特徴の把握の段階では、楽曲のよさに気付かせるために、鑑賞のポイント（楽器の響き・旋律の特徴・表現方法等）を提示して聴かせ、生徒の意識を焦点化させる。
- ・ 西洋音楽との違いを把握する場面では、一学期に学習したビバルディ作曲「春」と雅楽「越天楽」を聴き比べることで、楽器の音色の特徴や拍子、音の重なりの特徴などに気付かせる。
- ・ 雅楽や郷土の音楽に意欲的に取り組ませるために、映像や音源の提示の仕方を工夫する。
- ・ 雅楽の楽器の音色の特徴に気付かせる場面では、合奏におけるそれぞれの楽器の役割を意識して鑑賞させる。
- ・ 雅楽の旋律を味わわせるために、移調して身近な楽器（リコーダー・締太鼓・トライアングル等）で演奏させる。
- ・ 音楽の様々な要素と楽曲の雰囲気や曲想との関連を感覚的にとらえさせ、自分たちの表現に生かすよう助言する。
- ・ 郷土の音楽の雰囲気を生かして、和太鼓のリズムや歌い方（曲種に応じた発声）、歌詞の創作などを工夫して表現に取り組ませる。
- ・ 「沖永良部の子守歌」を歌う場面では、鹿児島と琉球の旋律や楽器の違いに気付かせる。

#### エ 学級の実態

本学級の生徒たちの本題材に関する実態は、次のとおりである。

生徒たちの音楽の嗜好は、多岐にわたっている。中でも、特に、歌謡曲やフォークを好んで聴いているが、童謡・唱歌・民謡などにはあまりなじんでいない。また、我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽に対しても親しみや面白さを十分には感じていないが、生の演奏や本物の楽器に触れてそのよさを味わいたいという思いをもつ生徒が多い。

一方、生徒は日常生活のあらゆる場面（神社の参拝や小学校での運動会等）において我が国の伝統的な音楽が自分たちの生活に深くかかわっていることに気付いている。また、三味線や蛇皮線、和太鼓（川薩地方の五つ太鼓を含む）などの和楽器への関心は高く、郷土の文化に対して興味をもっている生徒も多い。

我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽の言葉や旋律が難しいため、親しみにくく興味がないと感じている生徒もいるが、多くの生徒が郷土の音楽に関心を持ち、自ら郷土の楽器で演奏することを望んでいる。

以上のことから、生徒は我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽に対して全く興味や関心がないのではなく、これまで直接経験する機会が少なかったため「特別なもの」というイメージをもっていることが分かる。そこで、授業において実際に和楽器に触れる活動を取り入れることで、郷土の音楽をより身近に感じることができるのではないかと考える。

オ 指導計画 (全6時間)

教材 A: 雅楽「越天楽」 B: 「鹿児島おはら節」  
C: 「沖永良部の子守歌」

時	教材	学習内容
1	A B C	題材全体の概観と学習計画, 初発の感想のまとめ, 西洋音楽との違い, 雅楽の全体的な特徴の把握
2		雅楽の楽器の音色や奏法の特徴の把握, 雅楽の旋律の練習
3		雅楽の旋律の合奏
4		代表的な郷土の音楽の特徴の把握, 「鹿児島おはら節」の旋律の斉唱
5		「鹿児島おはら節」のグループ練習を中心とした合奏練習, 中間発表会
6		「鹿児島おはら節」の合奏の仕上げ, 発表会 (録音会) 「沖永良部の子守歌」の旋律の斉唱

カ 授業の実際

(ア) 練り合う・味わう 段階 (4 / 6時)

○ 指導目標

- 我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽のよさに気づき, 表現活動の面白さを味わうことができるようにする。

○ 実際

過程	学習活動	教師の指導の手だて <input type="text"/> 生徒の姿 <input type="text"/>
振り返る (5分)	1 前時の学習を振り返る。 ・ 雅楽「越天楽」の合奏において, 工夫する点を話し合う。	○ 雅楽「越天楽」の冒頭を, 雅楽の演奏とパソコンによる演奏とで聴き比べをさせた。
見通す (5分)	2 本時の目標を確認する。 我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽のよさを生かし演奏を工夫しよう。	・ パソコンの機能には感心しながらも, 機械的で面白みのない演奏に物足りなさを感じ, 雅楽の独特な雰囲気を再認識していた。  雅楽の演奏は, ・ 音を丁寧に重ねていく感じ。ゆったりのんびり演奏する。 ・ 一つ一つの音がたっぷり伸ばして引きずるような感じ。 ・ 強弱で迫力を付ける。
練り合う (35分)	3 雅楽「越天楽」を演奏する。 (1) 全体合奏 (2) パート練習 (3) 録音会 (4) 感想のまとめ	○ 身近な楽器を利用して演奏に取り組みさせた。 主旋律 (リコーダー) ・笙 (鍵盤ハーモニカ) ・鞆鼓 (小太鼓) ・衆太鼓 (大太鼓) ・細鼓 (トライアングル) ○ 雅楽の雰囲気を生かして演奏するためにパートごとに工夫する点を話し合わせた。 ○ 録音を通して, 自分たちの演奏を振り返らせた。

4 郷土の音楽のよさを調べる。

(1) おはら祭りの映像を視聴する。

(2) 「鹿児島おはら節」の旋律を歌う。

5 学習のまとめをする。

- ・ パート練習の際、生徒同士で教え合ったり教師に聴いたりするなど、積極的に取り組んでいた。
- ・ リコーダーでタンギングせずスラーや装飾記号など変化を付けて吹いたり、鍵盤ハーモニカで強弱を付けたり指揮者的役割を鞆鼓役が取り組んだりして、生徒は演奏を楽しんでいた。

### 雅楽を演奏してみても・・・

- ・ 本物の雅楽の楽器を使ってみた。
- ・ 我が国の伝統的な音楽が吹けてうれしかった。
- ・ 雅楽に少し近付けた気がする。
- ・ 難しかったけど、その分達成感があり面白かった。
- ・ 雅楽を聴くだけでなく、演奏することもとてもいいと思った。
- ・ 緊迫した空気の中で吹くことができた。
- ・ 今までと違って、タンギングをしないようにゆっくり演奏して、他の曲とはひと味違った吹き方で楽しかった。
- ・ 指揮者がいないので難しいと思ったけど、それほどばらけなかった。

### ○ 考察 (授業仮説①・②)

- ・ 雅楽の演奏の特徴やそのよさを生徒自身に気付かせる手だてとして、パソコンの機械的な音を聴かせた。正確ではあるが響きや表現が機械的なパソコンの音は、生徒が本物の音楽のもつよさや味わい(ポルタメント奏法、各楽器の音の重なり、速度とその変化など)をより一層明確に感じ取るのに効果的であった。
- ・ これまでの鑑賞の学習では、楽曲の構成要素や表現要素に気付く活動が主で、そこで気付いたことを表現活動に生かす取組をほとんど行ってこなかった。今回は、生徒が日ごろあまり親しんでいない音楽だったので、鑑賞活動でとらえたことを生徒自ら表現に生かすことで、より明確にその特徴に気付くことができたようである。音色の類似した身近な楽器で、雅楽の演奏に近付けるために楽曲の感じを生かして演奏を工夫する活動が、生徒の感性に響き充足感を味わわせることに効果的であることが分かった。
- ・ 雅楽の旋律を演奏することを通して、生徒は我が国の伝統的な音楽の特徴に気付くことができた。特に、我が国の伝統的な音楽には指揮者が存在しないため、打楽器が音楽の終始や速度に大きな役割をもつことを演奏を通して感じ取ることができた。郷土の音楽「鹿児島おはら節」においても和太鼓が加わることで、音楽全体が引き締まり速度の面などで重要な役割があることに生徒は気付くことができた。



(イ) 練り合う・味わう 段階 (5 / 6時)

○ 指導目標

ア 「鹿児島おはら節」のにぎやかな雰囲気を感じ取り、演奏に生かすことができる。

イ 和太鼓のリズムや歌い方を工夫して、表現の楽しさを味わうことができる。

○ 実際

過程	学 習 活 動	教師の指導の手だて <input type="text"/> 生徒の姿 <input type="text"/>
振り返る (10分)	1 前時の学習を振り返る。 (1) 雅楽「越天楽」の旋律を合奏する。 (2) 「鹿児島おはら節」の旋律を歌う。	○ 民謡独特の雰囲気を味わうために、範唱CDを聴かせた。 ↓ ・ 民謡歌手の歌から、生徒は自分たちの歌い方との違いに気付くことができた。
見通す (10分)	2 本時の目標を確認する。 歌い方やリズムを工夫して、郷土の音楽「鹿児島おはら節」を演奏してみよう。	・ 声(歌い方)の感じが違う。 ・ メロディが少し違う。 ・ 三味線なので雰囲気が違う。
練り合う (25分)	3 「鹿児島おはら節」を合奏する。 (1) グループ編成 ・ 歌 (23名) ・ 締太鼓 (5名) ・ アルトリコーダー (10名) (2) グループでの話し合い (3) グループ練習 (4) 全体合奏 (録音会)	○ 合唱奏に締太鼓を活用した。 ○ 和太鼓のリズム、歌い方やリコーダーの吹き方、歌詞の創作など自分たちで演奏を工夫させた。 ↓ ・ 和太鼓への興味や関心が非常に高く、リズムや打ち方を工夫することに積極的に取り組んでいた。 ・ 作詞活動においても、工夫されたユニークなものが創作された。
まとめ (5分)	4 学習のまとめをする。 ・ 各自の学習への取組を振り返る。	○ 「鹿児島おはら節」を演奏してみて・・・ ・ 自分で作詞したりして楽しかった。 ・ 和太鼓をたたけてよかった。 ・ みんなで心をつなげて演奏ができた。 ・ 歌い方をあまり工夫できなかった。 ・ ほかの和楽器を使って、いろんな日本の歌を演奏してみたい。 ・ 鹿児島(郷土)について学ぶことができてよかった。

○ 考察 (授業仮説③)

- ・ 今回の授業では、5台の締太鼓を準備したが、和太鼓を希望する生徒は学級の半数以上を占めた。本物に触れることに生徒が強い欲求をもっていることが分かった。
- ・ 作詞活動において、教師が創作の糸口として例を示すことで、生徒は川内や鹿児島について

ユニークな内容の歌詞を創作することができた。自分たちの言葉で民謡を楽しむ活動を通して、生徒は民謡が日常生活に根ざし、即興的な側面をもっていることに気付くことができた。

○ 川内川を眺めてみれば 網を引くのは オハラハー ガラッパドン	ハヨイヨイヨイヤサット
○ 川は川内 がらっぱも川内 食べてうまいは オハラハー しんこだんご	ハヨイヨイヨイヤサット
○ 桜島には 火山があるよ 島の人たち オハラハー 灰かぶり	ハヨイヨイヨイヤサット
○ 寺山見下ろす大河 一級河川の オハラハー 川内川	ハヨイヨイヨイヤサット
○ だんご川内 ちりめんも川内 川内名物 オハラハー しんこだんご	ハヨイヨイヨイヤサット

- ・ 合唱奏において、自分たちのこれまでの学習経験を生かし、和太鼓のリズムや歌い方を工夫したり歌詞を作ったりする活動を通して、郷土の音楽への意識が変化し、生徒の多くがこれまで以上に身近に感じるようになったようである。
- ・ 演奏を工夫する場面で、まず個人での取組を行った後にグループ活動に入った方が、一人一人のよさをもっと前面に出てくるのではないかと考えた。

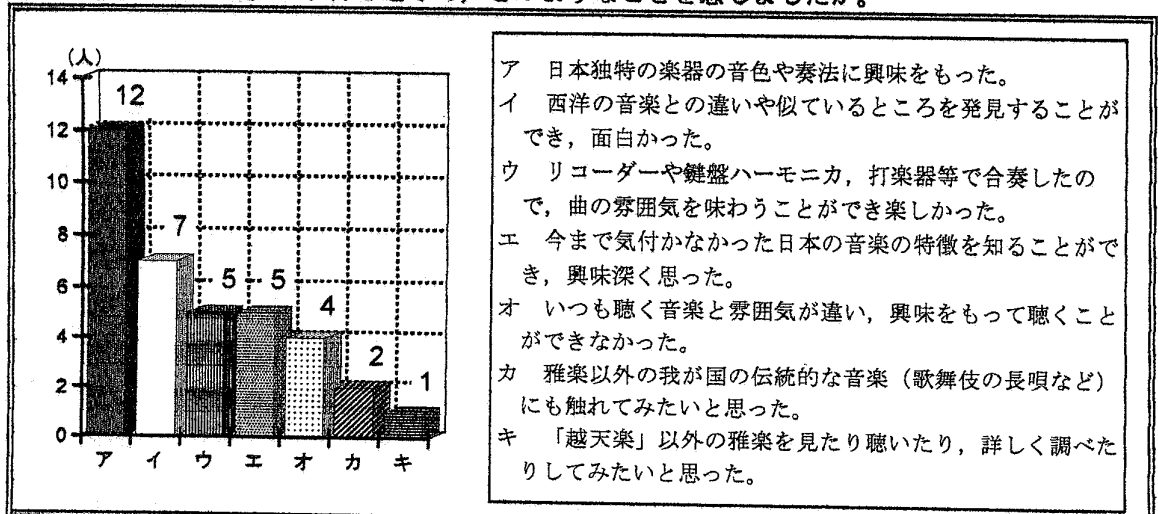


### (3) 実証授業後の生徒の実態

生徒が我が国の伝統的な音楽のよさを味わうことができるように、授業仮説に沿って実証授業を展開してきた。授業を終えて、我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽に対しての生徒の意識がどのように変化したかを、授業後の意識調査の結果から述べる。

〔実施日：平成14年1月15日（火） 対象者：男子21人 女子15人 計36人〕

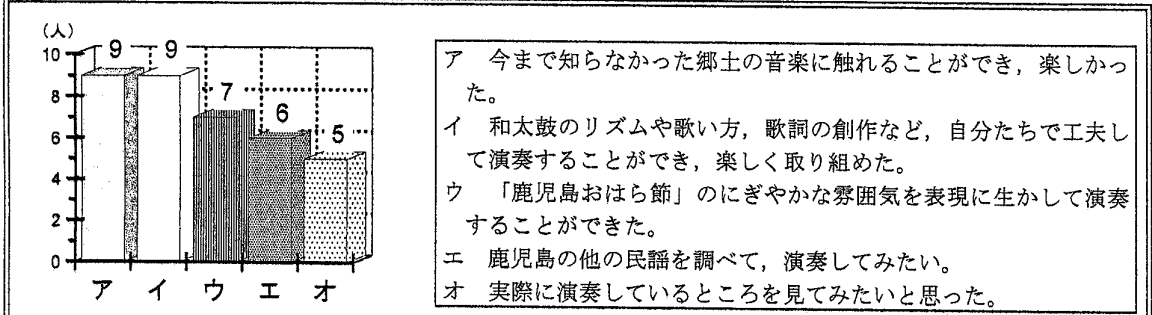
問1 雅楽「越天楽」の学習を通して、どのようなことを感じましたか。



- ア 日本独特の楽器の音色や奏法に興味をもった。
- イ 西洋の音楽との違いや似ているところを発見することができ、面白かった。
- ウ リコーダーや鍵盤ハーモニカ、打楽器等で合奏したので、曲の雰囲気味わうことができ楽しかった。
- エ 今まで気付かなかった日本の音楽の特徴を知ることができ、興味深く思った。
- オ いつも聴く音楽と雰囲気が違い、興味をもって聴くことができなかった。
- カ 雅楽以外の我が国の伝統的な音楽（歌舞伎の長唄など）にも触れてみたいと思った。
- キ 「越天楽」以外の雅楽を見たり聴いたり、詳しく調べたりしてみたいと思った。

生徒の半数以上が、これまであまり触れる機会がなかった雅楽であったが、西洋音楽との違いに気付き、音楽の特徴や楽器の音色、奏法に興味をもつようになったことが分かる。また、生徒自ら身近な楽器を使って、曲の雰囲気を味わう活動に積極的に取り組んだことも分かる。

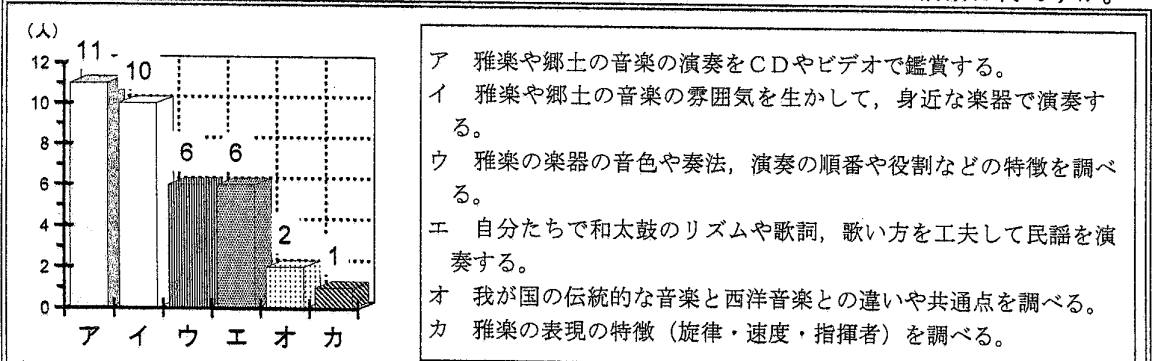
問2 「鹿児島おはら節」の学習を通して、どのようなことを感じましたか。



- ア 今まで知らなかった郷土の音楽に触れることができ、楽しかった。
- イ 和太鼓のリズムや歌い方、歌詞の創作など、自分たちで工夫して演奏することができ、楽しく取り組めた。
- ウ 「鹿児島おはら節」のにぎやかな雰囲気を表現に生かして演奏することができた。
- エ 鹿児島の他の民謡を調べて、演奏してみたい。
- オ 実際に演奏しているところを見てみたいと思った。

学習前の実態調査において、「鹿児島おはら節」を認知している生徒は、わずか4人であった。学習を進める中で、生徒はにぎやかな雰囲気を味わったり、表現を自分たちで工夫して演奏したり、歌詞を創作したりすることを十分楽しんだことが分かる。今回の学習を通して、生徒は郷土の音楽への興味や関心が高まり、郷土の他の曲への学習意欲も芽生えたようである。

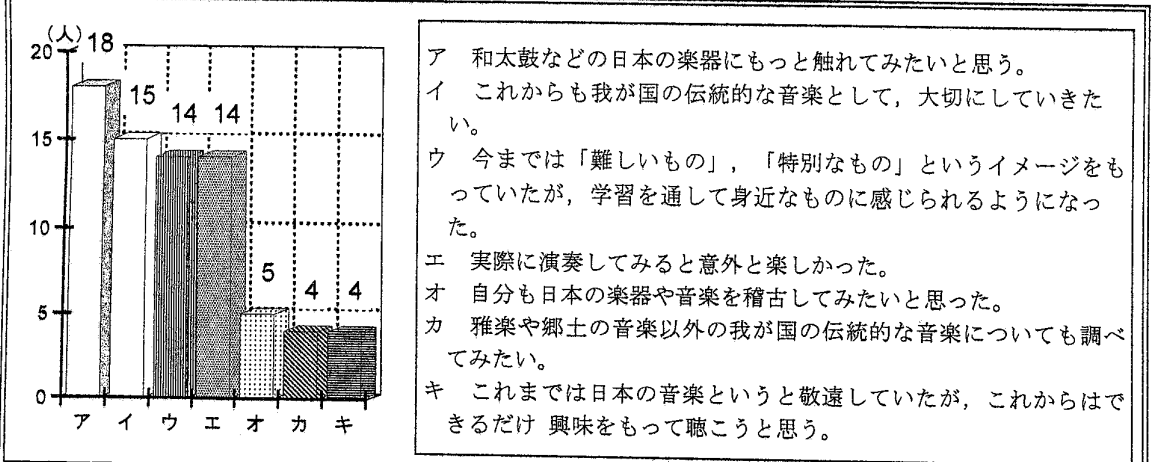
問3 「我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽に親しむ学習」で一番楽しかった活動は何ですか。



- ア 雅楽や郷土の音楽の演奏をCDやビデオで鑑賞する。
- イ 雅楽や郷土の音楽の雰囲気を生かして、身近な楽器で演奏する。
- ウ 雅楽の楽器の音色や奏法、演奏の順番や役割などの特徴を調べる。
- エ 自分たちで和太鼓のリズムや歌詞、歌い方を工夫して民謡を演奏する。
- オ 我が国の伝統的な音楽と西洋音楽との違いや共通点を調べる。
- カ 雅楽の表現の特徴（旋律・速度・指揮者）を調べる。

生徒は、あまり触れる機会がなかった我が国の伝統的な音楽に対して、新鮮な気持ちで鑑賞し、その雰囲気を十分に味わい、表現に生かして演奏することの楽しさを実感できた。また、CDやビデオで感じ取った我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽のよさを、演奏を通してより深く味わえた。さらに、雅楽の特徴を把握するために、楽器に注目させたり、和太鼓のリズムや歌詞、歌い方などを工夫させたりする活動が効果的であった。

問4 我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽に対して、どのような思いをもちましたか。〔複数回答〕



- ア 和太鼓などの日本の楽器にもっと触れてみたいと思う。
- イ これからも我が国の伝統的な音楽として、大切にしていきたい。
- ウ 今までは「難しいもの」、「特別なもの」というイメージをもっていましたが、学習を通して身近なものに感じられるようになった。
- エ 実際に演奏してみると意外と楽しかった。
- オ 自分も日本の楽器や音楽を稽古してみたいと思った。
- カ 雅楽や郷土の音楽以外の我が国の伝統的な音楽についても調べてみたい。
- キ これまでは日本の音楽という敬遠していたが、これからはできるだけ興味をもって聴こうと思う。

鑑賞と表現を関連させながら学習を進めたことにより、生徒が我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽をより身近なものとして感じるようになった。特に、今回は和太鼓を演奏に取り入れたことにより、和楽器に対する興味や関心が高まったようである。生徒は、本物に触れたいという欲求をもっていることが分かる。また、少数ではあるが、演奏したり調べたりする活動を通して、我が国の伝統的な音楽や郷土の音楽に深くかかわりながら、大切にしていきたいという意欲が芽生えてきた生徒も見られた。

(4) 実証授業を振り返って

ア 表現と鑑賞の関連を図った指導法の工夫について

今回の実証授業において、雅楽の特徴やよさをより深く味わうことができるようにするために、表現と鑑賞の関連を図った指導を行った。これまで、生徒にとっては、鑑賞活動だけでは、あまりなじみのない雅楽の特徴やよさを感じ取ることは難しい様子であった。しかし、今回、身近な楽器を使ってその雰囲気表現するために、生徒自ら演奏方法を工夫する活動を位置付けたことが、曲の味わいを感じ取らせることに効果的であることが分かった。

また、生徒が自分たちの演奏を録音し、振り返ることにより、表現方法を更に豊かにする手だてを考え、工夫し、楽曲の特徴やよさを生かした表現に高めたり、より深く味わおうとしたりする意欲や態度が育ってきたことが分かった。

授業終了後、生徒たちは次のような感想を述べている。

- 初めて日本の伝統的な音楽を勉強したときは、日本独特の感じで少し面倒だったけど、勉強していくうちに楽器で演奏したり歌ったりして、楽しくなっていた。
- 日本の音楽が思った以上に面白かった。日本の楽器をもっと知りたくなった。もっと日本の楽器を増やして欲しいです。どんなのがあるか触ってみたいになりました。
- 日本の楽器を見たり触れたりできて、ものすごくいい経験をしたと思いました。日本人だし、日本の音楽を学べてよかったです。日本人は、意外と自分たちの国の音楽を知らない人が多いんだなあと思いました。でも、授業で勉強したことで少し身近に感じられました。

イ 身近な郷土素材の教材化と、我が国の伝統的な音楽と関連付けた指導過程について

生徒の実態として、郷土の民謡やわらべ歌が豊富な鹿児島でありながら、その存在や価値を知ることなく過ごしている生徒が多かった。そこで、身近な郷土素材として祭りなどでよく歌い踊られ、にぎやかな雰囲気をもつ鹿児島の代表的な民謡「鹿児島おはら節」を取り上げることで、生徒に郷土の音楽に親しませることをめざした。また、島唄の中でも琉球の影響を大きく受けた「沖永良部の子守歌」を蛇皮線の伴奏で歌うことを通して、同じ鹿児島であっても地域独特の特徴をもつ郷土の音楽があることに気付かせたいと考えた。以上の二つの教材の学習を通して、生徒は郷土の音楽が面白いと感じ、そのよさにも気付くようになった。また、ほかにはどのような音楽があるのか興味を抱く生徒もいた。さらに、和太鼓や蛇皮線を使った演奏によって、郷土の音楽の面白さをより一層味わうことができた。

また、我が国の伝統的な音楽と郷土の音楽とで一つの題材を構成し、関連付けた指導を展開したことにより、生徒は同じ日本の音楽にも様々な音楽があり、それぞれに特徴やよさがあることを理解でき、我が国や郷土の文化や伝統を大切にしていこうとする心情や態度を培うのに有効であった。

授業終了後、生徒たちは次のような感想を述べている。

- 授業を通して、鹿児島の郷土を学ぶことができてよかった。時々「鹿児島おはら節」などを口ずさんだりするかもしれない。演奏がけっこうきれいにできたと思う。
- 「鹿児島おはら節」は、歌詞を作って歌ったけど、難しかった。けれど、うまく歌えたのでよかった。
- 他の鹿児島の音楽を学んで、自分で歌えるように覚えたい。
- 沖永良部は、音楽文化においては沖縄の方に入るということに驚いた。